

# 外科領域における治療選択肢としての漢方の実際とこれから

医療法人相生会 福岡みらい病院 外科部長 品川 裕治 先生

1983年 山口大学医学部 卒業、第二外科 入局  
1985年 社会保険 小倉記念病院 外科  
1991年 米国 ミネソタ大学 外科留学  
1993年 山口大学 第二外科、錦町立中央病院 外科部長  
1995年 小郡第一総合病院 外科 手術室部長  
2000年 国立小倉病院(現 国立病院機構小倉医療センター) 外科医長、  
救急センター部長  
2015年 医療法人相生会 杉岡記念病院(現 福岡みらい病院) 外科部長  
2016年 医療法人相生会 福岡みらい病院 外科部長



博多湾に建設された人工島の福岡アイランドシティ(福岡市東区)は、現在も開発が進められている。医療法人相生会福岡みらい病院は「心を尽くした最善の医療を」を理念に、慢性期病院としての歴史がある従来の「新吉塚病院」と、整形外科専門病院の「杉岡記念病院」が統合した、多機能を有する病院として2016年、同地に開設された。同院の外科部長である品川裕治先生はご専門の消化器外科を中心とした外科診療を行いつつ、日本東洋医学会漢方専門医として漢方診療も行っておられる。そこで今回は品川先生に、外科領域からみた漢方診療の実際とこれからの医療における漢方の役割について伺いました。

## 手術から漢方診療まで対応している当院外科

当科は、私を含めた医師2名(いずれも外科学会、消化器外科学会専門医)の体制で診療を行っています。鼠経ヘルニアや痔の治療、胃瘻造設術、虫垂切除術、腹腔鏡下胆嚢摘出術などの手術を行っているだけでなく、他院で手術を受けられた方のリハビリ入院や、合併症などの問題で当院では対処できない患者さんを専門病院に紹介するというような、いわば医療の橋渡しの働きもしています。

さらに当科では、私が漢方診療を行っています。正式に「漢方外来」を標榜しているわけではありませんが、当院のホームページに外科外来で漢方診療を行っていることが紹介されており、最近では漢方診療を目的に受診される患者さんも増えてまいりました。

## 患者さんの苦痛を除くためには漢方も重要な治療選択肢

私は、医学部卒業後は外科医としての研鑽を積んでいましたが、ある時、自身の鼻炎に対して小青竜湯を服用する機会がありました。実際に服用したところその効果に驚き、“漢方薬は効く”という印象を持ったのが、漢方に強く

興味を持つようになったきっかけでした。

その後、外科診療において漢方薬を活用しながら、漢方治療の経験も積んできました。たとえば、がん治療において、主治医は手術後最低でも5年間は患者さんをフォローしますが、患者さんは経過中にいろいろな症状を訴えられます。それぞれの愁訴に応じて専門の診療科をご紹介することもあるのですが、「異常なし」で戻されることも少なくありません。しかし、検査では異常がなくても、患者さんの苦痛は続いています。そのような患者さんも何とかしたい、との想いをかなえてくれるのも漢方でした。

外科は、患者さんの治療選択肢の一つに手術という治療をご提供しますが、患者さんの苦痛を取り除くためには手術以外の治療を提供することも必要です。私にとってのそれが漢方なのです。

## 外科における漢方診療の実際

外科における汎用処方としては大建中湯が広く知られていますし、私も使用する機会が多くあります。その他に術後の体力回復などには人参養栄湯などの補剤、創口の痛みが続くような方には駆瘀血剤などを使用しています。また、当科には痔の患者さんが多くいらっしゃるの、桂

枝茯苓丸などの駆瘀血剤や補中益気湯、硬便傾向の方には乙字湯なども使用しています。

大腸癌検診で便潜血陽性の患者さんが二次検診で受診されることがあります。その患者さんが、普段から便秘傾向なら麻子仁丸、下痢傾向が続くようなら真武湯などを処方するというように、患者さんの主訴や受診の目的のほかにも目配りをしています。そうすると、外科外来が自然と漢方外来になっています。

院内の他診療科からの紹介患者さんも多く受診されます。たとえば、整形外科で手術を受けた患者さんで、何も悪くはないのだけれど痛みがなかなか取れない、というような、不定愁訴を有する患者さんをご紹介いただくなど、他診療科との連携をとりながら診療しています。

### 多くの症例で漢方の効果を実感

私が日々の診療に漢方を組み入れるようになって30年が経過しましたが、漢方の効果を実感した症例は数多くあります。その一つが半夏厚朴湯でした。半夏厚朴湯の使用目標が咽中炙癢であることをある講演会で聞いていたのですが、そのわずか数週間後に、まさしく咽中炙癢を訴える患者さんが来院されました。内視鏡検査等で器質的な異常はなかったため、半夏厚朴湯を処方したところ、2日後にその患者さんが突然外来にいられて、「あんなに強い薬を飲んでも大丈夫ですか？」と問われたのです。驚いたことに、服用されたところ直ぐに症状が改善したとおっしゃいました。

腹痛を主訴に受診された患者さんですが、検査では異常がなく、鎮痙剤などの治療ではまったく症状が改善しません。いろいろとお聞きすると、冷えや浮腫みなどもあるので、当帰芍薬散をベースに芍薬甘草湯の頓用を処方したところ、当日に当帰芍薬散の服用だけで症状が改善しました。

前医から引き継いだ、誤嚥性肺炎を月1回は発症している患者さんに補中益気湯を処方したところ、その後は発症頻度が年1~2回になりました。その患者さんはお亡くなりになりましたが、亡くなる頃には1年間で1回も発症しなかった、という経験もあります。

### 漢方治療は患者さんに優しい医療

漢方治療の良さは、なによりも患者さん全体のバランスを整えることによって、本来のあるべき姿に近づける、さらには戻ることができる点にあります。また、特に高齢の患者さんは、複数の医療機関を受診してきた歴史の中でいろいろな薬剤が積み重なり、いわゆる「ポリファーマシー」の状態にある方が多くいらっしゃいますが、適切な



(福岡みらい病院 提供)

漢方治療を組み入れることでポリファーマシーの解消にもつながります。このように漢方は患者さんにとって優しい医療です。加えて、患者さんとのコミュニケーションにおける手助けにもなります。

漢方は、特にプライマリケアをされる立場の先生には必須ではないかと思っています。専門性が求められる現場にいらっしゃる先生には患者さんのすべてを診ることは難しいですが、プライマリケア医にはいろいろな手段を駆使しながら患者さんに寄り添うことが必要だと思います。その点で漢方は、患者さんに寄り添う手段として、患者さんとの会話にも役立つと思っています。

私は診療の時に、「他に気になることはありませんか？」とお聞きしています。漢方診療をしていると、患者さんの訴えが処方選択のヒントになるからです。ところが、患者さんにとってはそれが驚きのようで、“そのようなことを聞かれたのは初めてです”とおっしゃいます。

### 漢方を多くの方に知っていただきたい

このように漢方は、これからの医療において必須であると思います。私自身も漢方の研鑽を続けていますが、あまりにも奥が深い学問体系であり、それを極めるのは容易ではないことも実感しています。むしろ、せつかくの素晴らしい医学である漢方の良さを、一人でも多くの方々に知っていただきたいと考え、当院のホームページや個人のTwitterなどを中心にあらゆるメディアを通じての発信を試みているところです。

患者さんやご家族を含め、多くの一般の方々に漢方の良さを知っていただきたいと思っています。そのために、今後も漢方の正しい情報を広く発信し続けることで、微力ながらもこれからの医療に貢献したいと思っています。

取材：株式会社メディカルパブリッシャー 編集部 写真：荒川修造